

川崎医科大学と附属高校との入学前教育の取り組みとその評価 (2016～2018年度)

沖野哲也¹⁾, 泰山浩司²⁾, 宮本 修³⁾, 川上真美⁴⁾, 小野光男⁵⁾, 大村泰士⁴⁾

1) 川崎医科大学微生物学

2) 川崎医療福祉大学リハビリテーション学部視能療法学科

3) 川崎医療福祉大学医療技術学部臨床工学科

4) 川崎医科大学附属高等学校

5) 川崎医科大学学生寮

(令和3年11月15日受理)

Efforts and evaluation of pre-entrance education between Kawasaki Medical School and
Kawasaki Senior High School from 2016 to 2018

Tetsuya OKINO¹⁾, Kouji YASUYAMA²⁾, Osamu MIYAMOTO³⁾, Mami KAWAKAMI⁴⁾,
Mitsuo ONO⁵⁾, Taishi OHMURA⁴⁾

1) Department of Microbiology, Kawasaki Medical School

2) Department of Orthoptics, Faculty of Rehabilitation, Kawasaki University of Medical Welfare

3) Department of Medical Engineering, Faculty of Health Science and Technology, Kawasaki
University of Medical Welfare

4) Kawasaki Senior High School Attached to Kawasaki Medical School

5) Student dormitory, Kawasaki Medical School

(Accepted on November 15, 2021)

抄 録

川崎医科大学附属高等学校は全国で唯一の医科大学附属高校である。川崎医科大学(以下、本学)は、附属高校生を対象とした学校推薦型選抜を実施し、本学に入学が決定した3年生と補習科生を対象に、附属高校と連携して、医科大学入学前研修と称する入学前教育を行っている。2011～2015年度の取り組みは、『高大連携の点検と評価2016』で紹介した。本研究は、2016～2018年度に生徒にアンケート調査を行い、入学前研修の教育効果を点検・評価する目的で行った。研修は全てスクーリングで行い、附属高校と本学で、2016・2017年度は4週間、2018年度は3週間実施した。附属高校では各教科の担当教員が、教科書での復習や実験、プレゼンテーションの技法、調査・文献の要約などを行った。大学では第1学年の授業を担当する一般教養と基礎医学の教員が、課題解決型学習や実験、入学後に学ぶ内容の授業・実習・演習を行った。研修後、生徒(2016年度20名、2017年度21名、2018年度19名)を対象にアンケートを行い、附属高校から提供された集計結果を基に教育効果を検証した。その結果、附属高校での研修には70～88%、大学での研修には76～88%の生徒が「取り組めた」「まずまず取り組めた」と回答した。研修の感想についての自由記述回答から、生徒たちが、研修の到達目標である「グループ学習を経験する」「研究(実験)のおもしろさを体験する」「自分の考えを発表する力を身につける」を肯定的に受け止めており、大学の研修内容を難しいと感じな

がらも、大学入学後に必要な基本的な学習基礎を身につけ、入学後のイメージを確立できていることが示唆された。この研修プログラムは、基礎学力を維持し、入学後の学修に対する不安を払拭し、医学を学ぶ意欲の強化に有意義と考える。

キーワード：高大連携、入学前教育、モチベーション、スクーリング型、医学部

Abstract

Kawasaki Senior High School is the only school attached to a medical school in Japan. Kawasaki Medical School provides the recommended entrance examination for third-year students and students who failed the entrance examinations and then re-attempted a year later for admission to Kawasaki Medical School. We formulated a program for pre-entrance education to the students who passed the recommended entrance examination and decided to enter Kawasaki Medical School. Efforts were introduced from 2011 to 2015 through a program entitled “Inspection and evaluation of high school cooperation 2016.” This study aims to confirm and evaluate the effectiveness of the educational program by conducting a questionnaire survey with students from 2016 to 2018. The program was implemented within school settings for 4 weeks in 2016 and 2017 and 3 weeks in 2018 at the high school and the medical school. In high school, teachers per subject conducted experiments, presentation techniques, surveys, and literature summaries. At the medical school, faculty of general liberal arts and basic medical sciences as well as those who were in charge of the first-year classes conducted project-based learning and experiments, as well as lessons, practical training, and exercises. After the program, the questionnaire survey was conducted with students ($n = 20, 21$, and 19 in 2016, 2017, and 2018, respectively). Analysis was further conducted to verify and evaluate the educational effect of the program. The result indicated that 70%–88% students answered that they could perform well or reasonably well in high school while 76%–88% of students said that for medical school. Based on the free-form answers on their impression about the program, the students positively accepted the objectives of the program, such as experiencing group learning, experiencing fun in research (experiments), and acquiring the ability to express your thoughts. The responses suggested that the students felt the content of the program for medical schools was difficult. However, they acquired the basics of learning considered necessary after entering medical school and established their image after entering medical school. Moreover, the program increased their motivation to become doctors. Thus, the study infers that the program, which was conducted pre-entrance education, is meaningful in that it can help relieve the anxiety of high school students about learning after entrance and provide them with basic academic skills.

Key words: Collaboration between high school and medical school, Pre-entrance education, Motivation, Face-to-face classes, School of medicine

はじめに

近年、多くの大学で推薦入試やAO(Admissions Office)入試などにより早期に入学が決まる高校生を対象とした入学前教育が、国公立のいずれも半数以上の大学で実施され、国立大学で

はほぼ70%、私立大学と私立短期大学では約80%に達している¹⁾。川崎医科大学附属高等学校(以下、附属高校)は全国で唯一の医科大学附属高校であり、附属高校での3年間と川崎医科大学(以下、本学)での6年間を含めた「9

年間一貫教育」を実施している。本学は附属高校生を対象とした学校推薦型選抜を実施しており、附属高校は開校以来の卒業生1,739人のうち1,567人（90.1%）が本学に進学した（2021年4月現在）。本学は附属高校と連携して、入試合格が決まって入学までの間、医科大学入学前研修（以下、入学前研修）と称する入学前教育を行っている。2011～2015年度の取り組みは、本学ホームページの内部質保証・大学評価の『高大連携の点検と評価2016（平成28）年』で紹介した²⁾。文部科学省は早期に合格が決定した入学予定者に対し高校と大学が連携して入学前教育の充実を図ることを促している³⁾。本学の入学前研修は、まさにそれを踏まえた取り組みである。本研究は、2016～2018年度に生徒にアンケート調査を行い、入学前研修の教育効果を点検・評価する目的で行った。

対 象

対象は、2016～2018年度に附属高校から本学への入学が決まった3年生・補習科生（1浪生）で、2016年度20名、2017年度21名、2018年度19名である。彼らに入学前研修を実施し、研修終了後に附属高校において受講者にアンケート調査を行い、その集計結果を基に入学前研修の教育効果を検証した。

入学前研修の実施方法

入試合格から大学入学までの学力の維持・補強と医学を学ぶモチベーションの向上を図る目的で、本学に入学が決まった附属高校現役生（3年生）および補習科生（1浪生）を対象に、1月下旬から3月初めまでの期間、附属高校の授業は1コマ50分で、本学での授業は1コマ60分で実施した。2016・2017年度は4週間、2018年度は3週間実施した。附属高校では各教科の教員が、教科書での復習や実験、プレゼンテーションの技法、調査・文献の要約などを行った。本学では第1学年の授業を担当する一般教養と基礎医学教室の教員が、課題解決型学習や実験、入学後に学ぶ内容の授業・実習・演習を行った。入学前研修の開始当初（2009年度）は、授業内容を担当教員が個別に考えていたが、2015年度から、担当教員が入学前研修を行う目的を共有し、研修における授業の位置づけを明確にするために、研修到達目標として7項目（表1）を設定した。授業担当者がこれらの中から一つあるいは複数個を選び、それに沿って授業等を行った。2018年度の教科科目内容を表2（附属高校）、表3（本学）に示す。また、附属高校においては、例年この研修期間に、本学進学予定者説明会・卒業生講話会・人権教育映画会・薬物乱用防止教室を実施している。毎年度末、

表1 医科大学入学前研修の到達目標

1	医科大学入学後に必要となる基本的な学習基礎を身につける
2	文章作成力を身につける
3	能動的・自発的学習の重要性を認識する
4	コミュニケーション力を身につける
5	グループ学習を経験する
6	研究（実験）のおもしろさを経験する
7	自分の考えを発表する力を身につける

表2 2018年度医科大学入学前研修の教科科目内容（附属高校）

教科科目	到達目標番号	実施コマ数	内 容
国語	2, 3 4, 5, 7	10	医療テーマについての調べ学習 ハンセン病・医療制度・メンタルヘルス・感染症・医療介護の仕事・救命救急・薬物乱用防止・臓器移植・終末期医療
公民	1, 2, 3 4, 5, 7	9	新聞の社説の要約 現代の医療問題 リドルストーリー（結末の存在しない物語）
数学	1, 6	9	確率分布と統計的な推測
物理	1, 2 4, 5, 6	9	基礎学力チェックテスト ゆで卵落下実験による衝撃吸収構造 物理学と医学の関係
化学	1, 2, 6, 7	11	単元別テスト 電子軌道・滴定実験
生物	1, 2 3, 5, 6	11	心臓の拍動数に関する実験方法を考える探究活動 カエルの解剖
英語	3, 4, 5, 7	10	英語でプレゼンテーション入門 英語でスピーチ原稿の組み立て・発表
体育	4, 5, 7	2	グループ活動・バレーボール

研修を担当した本学と附属高校の教員が一堂に会する全体会議を開き、入学前研修の振り返りを行った。

アンケート集計方法

教科ごとに、「入学前研修に意欲的に取り組みましたか」について、「取り組めた」「まずまず取り組めた」「あまり取り組めなかった」「まったく取り組めなかった」の4段階評価のアンケート調査を行った。

附属高校では、2016年度は7教科（国語・公民・数学・物理・化学・生物・英語）、2017・2018年度は8教科（国語・公民・数学・物理・化学・生物・英語・体育）について、回答を得た。2016年度は7教科について生徒20名の回答の合計140ポイント（ $7 \times 20 = 140$ ）、2017・2018年度は、8教科について生徒21名・19名の回答のそれぞれの合計168ポイント（ $8 \times 21 = 168$ ）、152ポイント（ $8 \times 19 = 152$ ）から4段階の割合

を計算した。

本学では、2016年度は6教科（物理・化学・生物・統計・日本語・英語）の担当教員別（12名）に、2017・2018年度は、9教科（物理・化学・生物・統計・日本語・英語・解剖学・生理学・微生物学）別について、回答を得た。2016年度は6教科の担当教員12名について生徒20名の回答の合計240ポイント（ $12 \times 20 = 240$ ）、2017・2018年度は、9教科について生徒21名・19名の回答のそれぞれの合計189ポイント（ $9 \times 21 = 189$ ）、171ポイント（ $9 \times 19 = 171$ ）から4段階の割合を計算した。

「高校での研修の感想を記入して下さい」「医科大学での研修の感想を記入して下さい」の自由記述回答は、計量テキスト分析ソフト KH Coder⁴⁾により単語出現頻度や共起ネットワークを分析した。

表3 2018年度医科大学入学前研修の内容（医科大学）

部署担当	到達目標番号	実施コマ数	内 容
学長	3	1	入学の心構え
1 学年担当 (舎監長)	3	1	勉強の取り組み方・寮での生活
自然科学（物理）	1	2	加速度・速度・距離の関係 雨の落下速度
自然科学（物理）	6	2	やさしおを使った放射線計測
自然科学（化学）	6	2	酵素の性質（温度、pH による反応の違い）
自然科学（化学）	1	2	分子模型をつくる
自然科学（化学）	1, 6	2	色素とグルコースの酸化還元反応（呈色・退色反応）
自然科学（生物）	1, 3	2	大学生活について（カリキュラムなどの紹介） 細胞膜と生命現象（細胞膜の働き）
自然科学（生物）	1	2	21世紀の医療を担う君たちへ（ヒトゲノム・医学医療）
自然科学（生物）	1	2	生体を構成する物質
自然科学（生物）	1, 3 7	2	生殖細胞に生じる遺伝的多様性 有性生殖による遺伝的多様性と遺伝の法則の基礎
自然科学（統計）	1, 5	2	フェルミ推定 フーリエ級数展開
語学（日本語）	2, 3 4, 7	3	マインドマップを通して学ぶ語彙・文章の情報収集法
語学（英語）	1, 3 4, 5	6	コミュニケーション演習（体験学習型） リスニング・スピーキング、語彙学習、長文読解演習
語学（英語）	2, 3 4, 5	3	英語によるコミュニケーション活動
解剖学	1, 3	1	人体解剖学とは：本学の人体解剖実習
生理学 1	1	1	診療科から考える進化 ーものを見ること、呼吸することの歴史ー
生理学 2	6	1	味覚の実験
微生物学	3	1	TED『エイミーカディ：ボディランゲージが人を作る』

結 果

「入学前研修に意欲的に取り組みましたか」について、「取り組めた」との回答が、附属高校・本学ともに年々高くなり、附属高校では70～88%、本学では76～88%の生徒が「取り組めた」「まずまず取り組めた」と回答した（図1 a, b）。附属高校の研修の感想についての回答（2016年度14名、2017年度8名、2019年度16名、合計38

名）について、共起ネットワーク分析を行った（図2）。個人名（人名、先生）および直接分析には関係しない動詞（思う、感じる、考える）と感動詞（ありがとう）を除外し、その上で、出現頻度が2以上ある単語間の関係性の分析を行った結果、サブグラフ1は「カエルの解剖」「楽しい」の共起から、サブグラフ2は「大学」「勉強」の共起から、サブグラフ3は「必要」「持ち物」

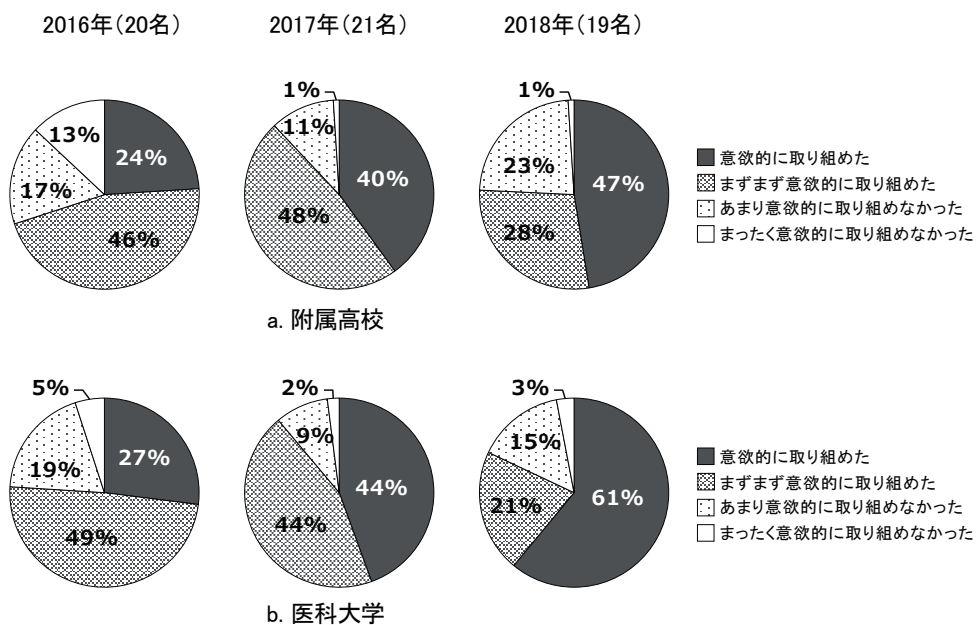


図1 アンケート結果 (a. 附属高校, b. 医科大学)

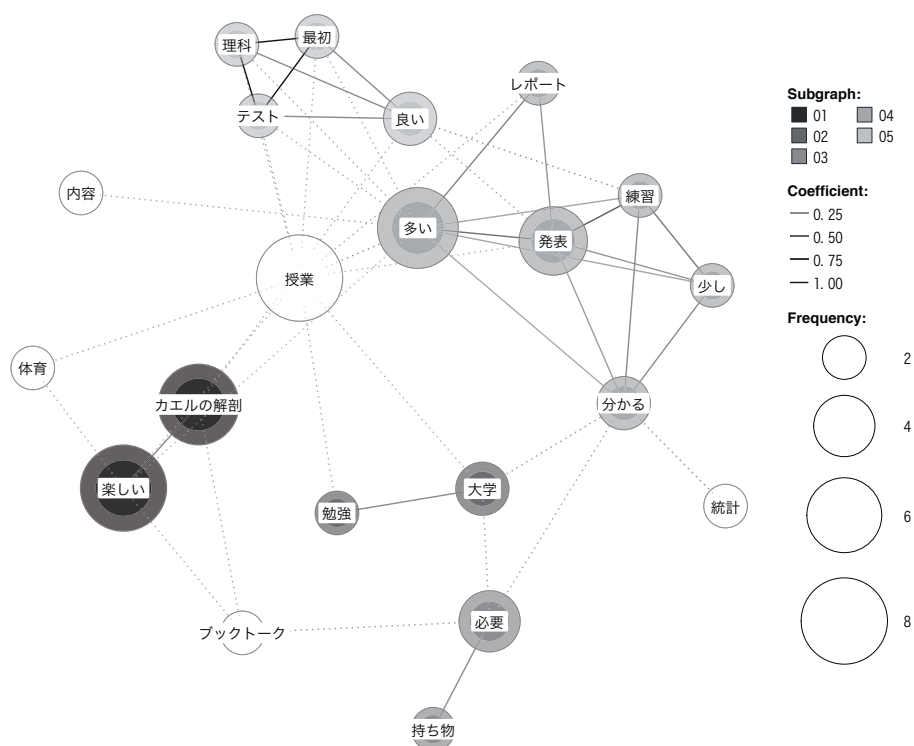


図2 附属高校の感想についての共起ネットワークの図

表4 医科大学入学前研修の感想アンケートの結果（自由記述）

附属高校（回答者 14 + 8 + 16 = 38名）

今までやってこなかったグループワークの楽しめる**授業**が多くて、**楽しく**学習できた。
カエルの解剖が**楽しかった**。
ブックトークが**楽しかった**。
大学前の勉強にあっている**授業**をしてくれた。
大学に行く上での予習という形で**授業**を受けさせていただき、自分にとってためになるものでした。
どの教科も**発表**の練習があったのが良かった。
実験や実習、レポート**発表**など今まで多くは、やってこなかった**授業**を行うことができたので良かった。
発表の練習が多く、**発表**の仕方が少し分かった。

医科大学（回答者 16 + 6 + 11 = 33名）

高校ではやらない**授業**ができて関心が持てました。
大学に入ってから**の授業**ペースや勉強の仕方などは参考になった。
高校の**授業**スタイルと異なった、**大学**独自の**授業**スタイルを肌で感じることができたので良かった。
大学に入った後の**授業**のイメージができ、良い時間が過ごせました。
研修では**大学**入学する際の心構えなど教えてくれてためになった。
親切で、**大学**生活に対して少し安心できた。
難しかったけど、興味深い内容も多かった。
時に**難しい**内容もあったが、**大学**での勉強などを学ぶことができて良かった。

* 抽出語を太字

の共起から、サブグラフ4は「発表」「多い」「分かる」「少し」「練習」「レポート」の共起から、サブグラフ5は「良い」「最初」「理科」「テスト」の共起から構成されていた。出現頻度の高かった特徴的な3つの「**授業**」と「**楽しい**」と「**発表**」を太字にして、肯定的な具体例を表4に示す。否定的な感想として、2016年度に「つまらない**授業**が多かった」、2017年度に「**大学**での必要性がよく分からないものがある」があった。要望として、2017年度に「後半に重たい内容が多いので分散してほしい」「必要な持ち物と不要な持ち物をはっきりしてほしい」があった。本学の研修の感想についての回答（2016年度16名、2017年度6名、2019年度11名、合計33名）

について、共起ネットワーク分析を行った（図3）。個人名（人名、先生）および直接分析には関係しない動詞（思う、感じる、考える）を除外し、その上で、出現頻度が2以上ある単語間の関係性の分析を行った結果、サブグラフ1は「話」「勉強」「入る」の共起から、サブグラフ2は「面白い」「優しい」「興味」「研修」「心構え」の共起から、サブグラフ3は「**難しい**」「**多い**」「**内容**」「**興味深い**」「**頑張る**」「**理解**」「**自分**」の共起から、サブグラフ4は「**見学**」「**時間**」の共起から、サブグラフ5は「**高校**」「**スタイル**」の共起から構成されていた。出現頻度の高い上位3つの「**授業**」と「**大学**」と「**難しい**」を太字にして、肯定的な具体例を表4に示

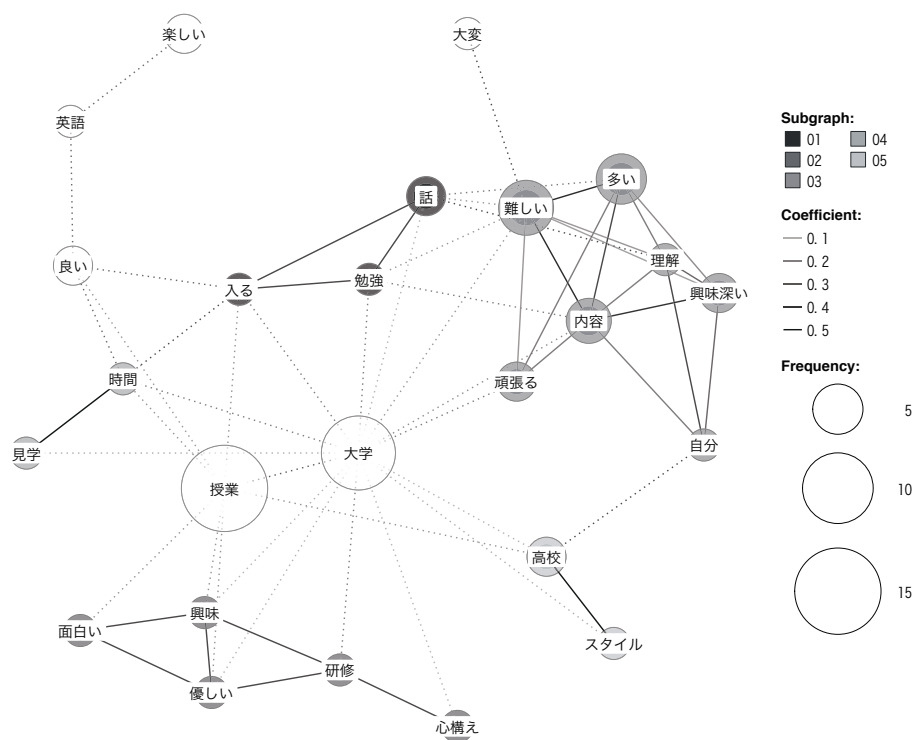


図3 医科大学の感想についての共起ネットワークの図

す。否定的な感想として、2016年度に「授業をもっと工夫してほしい」「話すことには一貫性を持ってほしい」「難しい話が多くて理解できなかった部分も多かった」があった。「難しい」に関して、2018年度に「説明がとても難しくて追いつくのが大変だった」「難しい内容が多く、大学でさらに頑張らなければ非常に厳しいと感じた。医科大学の先生方にいただいた言葉を胸に4月からよりいっそう頑張りたい」があった。要望として、2018年度に「大学見学（寮の見学とか）の時間が欲しい」があった。

考 察

入学前研修を8割の生徒が意欲的に取り組めており、有意義な内容と考える。ただし、「あまり取り組めなかった」「まったく取り組めなかった」との回答が、附属高校での研修では

12%～30%、本学での研修では11%～24%あり、否定的な感想もあった。到達目標を設定して以降、研修の目的がかなり明確になったが、高校と大学の同じ教科の教員間でのすりあわせが未だ十分ではなく、研修内容の一貫性が乏しかったことが要因として考えられる。

附属高校での研修に関する自由記述欄に、今までやってこなかった「カエルの解剖」「グループワーク」「ブックトーク（一定のテーマを立てて時間内に何冊かの本を他の生徒に紹介する）」など正規の授業ではない内容に「楽しい」との回答が多かったことは、附属高校の教員が到達目標の5、6を意識し、本研修に組み込んだ成果だと考える。「発表」についての回答が多くあったのは、国語・公民・化学・英語などの教科で、到達目標7（自分の考えを発表する力を身につける）を意識した授業を多くした結

果と考える。本学のアドミッション・ポリシー⁵⁾である「課題解決のプロセスや結果を的確に伝えるための基本的な表現力を有する」の強化に役だったと考える。

本学での研修に関する自由記述欄に、「大学に入ってからの授業ペース」「大学独自の授業スタイル」「大学入学する心構え」などの回答が多かったことから、「入学後のイメージ作り」に本研修が役立っていると考えられる。その要因として、実際に大学の講義室・実習室で、大学のカリキュラムにあわせた授業時間（60分）で実施できたことと、研修の時間割の最初に、学長が大学の理念について生徒に語りかける時間を設けたこと、2016年度から1学年担当（舎監長も兼ねる）の入学に際する心構えに関する授業を1コマ追加したことが挙げられる。「大学生活に対して少し安心できた」との回答から、生徒たちの入学後の学生生活に関する不安も軽減されたと考える。また、2014年度から、体験ゲームや振り返りを通してチームでの目標達成に取り組むプロセスにおけるコミュニケーションについて学ぶ、コミュニケーション演習（体験学習型）を取り入れた。これを2017年度から研修開始直後に実施するよう調整したことで、現役生と補習科生との間にリラックスした雰囲気ができ、グループ学習が円滑に進められるようになった。医学教育モデル・コア・カリキュラム⁶⁾A-41) コミュニケーションおよび本学のアドミッション・ポリシー⁵⁾である「協調性とコミュニケーション能力」の強化に役立つ研修と考える。

生徒から要望があった、大学見学（特に寮の見学）については、早急に、内容に組み込むことを検討していく。

日本リメディアル教育学会は、2011年に全国の大学を対象にアンケート調査を行い、入学前教育の実施目的を「大学での専門教育の導入準備」の初年次教育型、「推薦で入学してくる生

徒の学力維持・向上」「高校生として必要な基礎学力の確認・補習」のリメディアル教育型、そしてその両タイプを実施している併存型の3つのタイプに分類した結果、両タイプの併存型が53%と最も多かったと報告している⁷⁾。そのことから、入学前教育の内容を「職業をもつ一般社会人が備えるべき基礎能力を身につけることの重要性を早期から学生に理解させることの必要性を意識したもの」とする視点を重視している大学が多く、今後の課題として、「知識の習得」のみにとどまらず、「知識の活用」「探究」型の学習内容も視野に入れた教材を開発することが望まれるとしている⁷⁾。また、入学前教育を意味のあるものにするためには、大学教育関係者のみならず、高校の教員とも十分に連携を図り、入学前教育と入学後の初年次教育との内容の違いを明確にし、入学前教育を学士課程教育へと連動させていくためには、体系的なプログラムの策定が必要であるとしている⁸⁾。本学では、大学1年次のカリキュラムに「医科学の基礎」コースを設定し、そのなかにもリメディアル教育として自然科学教員と日本語教員が協同で担当する「医科学入門」を設けている。この科目を日本語教員が担当している理由は、入学時の日本語リテラシーとコンピテンシーの問題点を理解させるためである。また、初年次教育としては、当該コースに学長や学年担当を含む多くの教員が担当する「良医の礎」コースを設定している。さらに、「医科学の基礎」コースが終了した後の1年次2学期には、基礎医学教育として「人体の構造と機能」コースを解剖学や生理学の教員が担当するカリキュラムが組まれている⁹⁾。本研修を担当するのは、このカリキュラムを担当している一般教養と学長・1学年担当および解剖学・生理学の教員であり、本研修は、短期間ではあるが、医学部における入学前教育を学士課程教育へ連動させた体系的なプログラムであると考えられる。ただし、内容を「難

しい」と回答している生徒がおり、専門的な知識をどこまで取り入れるか、吟味する必要がある。

文部科学省は、入学前教育の充実を図るための方策として、早期に合格が決定した後の学習意欲を継続する観点から、“(1)各高等学校においても、大学と連携し学習意欲を維持するための必要な指導を行うよう努めること。(2)学校推薦型選抜の場合、合格決定後も、高等学校の指導の下に、高大が連携した取組を行うことが望ましい。(例：入学予定者に対して大学入学までの学習計画を立てさせ、その取組状況等を高等学校を通じ大学に報告させる等。)を促進すること”としている³⁾。本研修は、対象者が学校推薦型選抜(川崎医科大学附属高等学校)に合格した入学予定者であり、大学入学までの学力の維持・補強と医学を学ぶモチベーションの向上を図るという目的も、文部科学省の観点と合致している。

現在全国で行われている入学前教育を整理すると、高校生の自宅学習を基本とした「通信教育型」と高校生自身が進学予定の大学へ赴き授業形式で行われる「スクーリング型」の2形態に分類できる¹⁰⁾。対象者の3年生は附属高校の寮、補習科生は近隣の宿泊施設から、まず附属高校で午前の授業を受けた後、午後から本学へ赴き本研修を受けており、独自の「スクーリング型」だといえる。高大接続改革期における「入学前教育」の力点を、入学までの「空白期間」を埋める施策から、生徒の学習および入学後に学ぶ学問に対する意欲を高める施策へシフトさせる観点について、①高等学校の学習方法とかけ離れていないこと、②高等学校の学びと大学の学びの関連性を示し、学習への意欲を高めること、③成果物やフィードバックなどを通して、充実感が得られ、主体的に取り組める内容であること、④入学後に学ぶ学問への興味を醸成させ、入学後も意欲的に学習する準備とな

る内容であることの4つに整理されている¹⁰⁾。本研修は、これら4つの観点を含む内容になっており、適切と考える。③の成果物やフィードバックについては、レポートなどを高校側でデジタルファイル化して保存することを始めた。今後、eポートフォリオなどを活用し、高校と大学で共有し、入学後の学生支援やIRなどで活用できるものにしていく必要がある。

入学前研修のスケジュールや内容は、本学と附属高校の担当教員間による全体会議(年1回)で振り返り、大学側2名(附属高校担当学長補佐・高大連携担当副学長補佐)と附属高校側2名(教頭・教務部長)の4名で構成する高大連携担当者会議(年4回実施)で、検討・改善しながら柔軟に調整している。実施に際し、本学の教員と附属高校の教諭が教科ごとの連携をさらに密にし、医科大学附属高校としての入学前教育のプログラムを充実したものにしていく必要がある。

告 示

本論文の一部は、令和3年度川崎医科大学教育改革等支援事業で実施された。

本研究は、川崎医科大学・同附属病院倫理委員会の承認(承認番号3516)を受けた。

本稿の要旨の一部は第51回日本医学教育学会大会(京都)で発表した。

謝 辞

高大連携の取り組みに際し、全面的に協力していただいた学長および本学教員(教養・基礎・臨床系)、川崎医科大学附属高等学校教諭、本学の教材教具センター職員に感謝申し上げます。また、テキストマイニングの解析について、ご助言をいただいた本学特任教授の神田英一郎先生に心より感謝申し上げます。

引用文献

(ウェブサイトについて、すべて2021年9月15日にアクセス可能であった。)

- 1) 穂屋下茂, 小野博, 米満潔, 竹内芳衛: 全国の大学対象のアンケート実施とその結果. 大学における学習支援への挑戦 リメディアル教育の現状と課題 (日本リメディアル教育学会監修). 京都, ナカニシヤ出版. 2012. pp1-30.
- 2) https://m.kawasaki-m.ac.jp/etc/document/tenken-hyouka_2016.pdf (高大連携の点検と評価2016 (平成28年)).
- 3) https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/11/06/1397731_03.pdf (文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室 (平成30年)).
- 4) 樋口耕一: 社会調査のための計量テキスト分析 (第2版). 京都, ナカニシヤ出版, 2020.
- 5) <https://m.kawasaki-m.ac.jp/outline/policy.php#admission> (川崎医科大学入学者の受け入れに関する方針 (アドミッション・ポリシー))
- 6) モデル・コア・カリキュラム改訂に関する連絡調整委員会 モデル・コア・カリキュラム改訂に関する専門研究委員会: 医学教育モデル・コア・カリキュラム (平成28年度改訂版). 2017.
- 7) 椋本洋, 谷川裕稔: 入学前教育. 大学における学習支援への挑戦 リメディアル教育の現状と課題 (日本リメディアル教育学会監修). 京都, ナカニシヤ出版. 2012, pp75-105.
- 8) 井下千以子: 高大接続を目指した入学前教育の現状と課題. 初年次教育学会誌. 2015; 7: 85-93.
- 9) 川崎医科大学: 各学年と学年間における科目の繋がりについて. 2020 SYLLABUS (シラバス). 2020, p3.
- 10) 及川愛, 石田あすみこ: 入学前教育の力点はシフトしている～入学前教育を充実させる観

点の整理～・入学前教育の現状と課題. 大学時報. 東京, 日本私立大学連盟. 2019, pp66-73.

